

修羅能と『源氏物語』のことば

——源氏寄合を手掛かりとして修羅能の展開を考える

岩城 賢太郎

世阿弥関連の謡曲作品に見える『源氏物語』に関する詞章が、『源氏物語』本文に直接拠つたのではなく、『源氏物語』各巻の特徴あることばに基づく連歌付合である源氏寄合等を介したものであること、及びそれらの寄合が、二条良基周辺において成立した連歌資料に見えるものであり、世阿弥と良基との関係等から、世阿弥にもたらされたであろう経緯について、最初に指摘されたのは、世阿弥作の修羅能（教盛）における「クセ」の詞章を検討された和田エイ子氏⁽¹⁾であった。以降、諸氏によつて（松風）（須磨源氏）等に見える源氏寄合の検討等がなされてきた。

シテを光源氏とする（須磨源氏）、又『源氏物語』須磨巻にも触れられている在原行平の須磨謫居に基づく（松風）、何れも王朝物語と関わる作品であり、『源氏物語』に関することばが引用される必然は認められよう。しかし、修羅能はシテを武者とし、武者にまつわる「いくさ語り」を構成する作品である。『源氏物語』に関することばの見える修羅能（忠度）（教盛）は、『平家物語』の一の谷合戦譚に取材しており、須磨は一の谷合戦において平氏の搦手にあたる地であつたとはいえ、何故にシテの「いくさ語り」を聽かせる修羅能に、王朝物語の世界で培われた須磨の地のイメージを担う源氏寄合が用いられるのだろうか。それは、「花鳥風月に作り寄せて、能よければ、何よりもまた面白し。是、ことに花やかな所ありたし」（『風姿花伝』修羅）とした世阿弥の修羅能の能作手法と関わることは確かである。しかしその能作手法や効果等の分析は、まだ具体的に検討

が加えられているとは言い難い。例えは又、シテである武者と源氏寄合を介した『源氏物語』の物語内容との融合を図つたことが、世阿弥の修羅能の確立における創作であつたのかといった点についても検討はされていない。修羅能作品に見える源氏寄合については、検討すべき課題が多い。

謡曲詞章に見える『源氏物語』に関することばは、鎌倉中・末期に成立した早歌のような中世歌謡文芸に既に見えるものも多く、特に早歌は、外村南都子氏⁽²⁾が指摘されるように謡曲への影響は大きく、詞章に見える『源氏物語』のことばは、必ずしも連歌における源氏寄合を引用・転用したと見るべきではない例もあるはずである。しかし、謡曲作品への早歌等の中世歌謡文芸の影響についての具体的な検討は、まだ十分には進められておらず、実証にも困難が伴う。又、先覚が指摘される通り、謡曲作者の能作に、観世座の最大の庇護者であつた足利将軍家や二条良基等の貴顕層との交流がもたらしたものには大きかつたはずである。かような事情から、本稿では、早歌等の先行する歌謡文芸の影響を想定しつつも、連歌の源氏寄合を手掛けりとして修羅能を検討する。

修羅能作品に見える源氏寄合は、世阿弥作の修羅能等を経て、やがて世阿弥周辺における修羅能能作にも影響しているものと思われるが、修羅能の詞章における源氏寄合使用の様相を確認し、その手法を分析することとは、世阿弥グループ・世阿弥周辺の謡曲作者による、修羅能能作の手法を解明し、世阿弥以降の修羅能の展開を捉えることとも繋がる筈である。

(一) 中世文芸における『源氏物語』須磨・明石巻に關わる叙述 ——曲舞〈西国下〉など

修羅能作品の分析に入る前に、『源氏物語』古注釈書等以外の中世文芸に見える『源氏物語』須磨・明石巻に關わる叙述、及び世阿弥の能作に多

大きな影響を及ぼしたと思われる幽舞（西国下）を検討する。中世文芸の諸分野における『源氏物語』受容は、須磨・明石巻に集中しているわけであるが、その受容の様相を、須磨・明石巻に関わる記事から概観しておく。

『とはすがたり』巻五冒頭⁵に、以下の件りがある。

さても、安芸の國、厳島の社は、高倉の先帝も御幸し給ける跡の白波もゆかしくて、思ひ立ち侍⁶しに、：「こゝは須磨の浦」と聞けば、行平の中納言、藻薺垂れつゝわびける住まひも、いづくのほどにかと、吹き越す風にも間はまほし。長月の初めの事なれば、：千声万声

の砧の音は、夜寒の里にやと音づれて、波の枕をそばだてて聞くも、悲しき頃なり。明石の浦の朝霧に島隠れ行く船ども、いかなる方へとあはれなり。光源氏の、月毛の駒にかこちけむ心の内まで、残る方なく推し置られて、とかく漕ぎ行くほどに、：

須磨・明石の地と『源氏物語』須磨・明石巻との結び付きは、鎌倉時代末の『とはすがたり』にも見えるわけである。後深草院二条の旅は九月初旬で、思い起されるのは虫の音や砧の音等の秋の風物、及び『源氏物語』須磨・明石両巻の秋の光源氏の様に関する件であるが、「波の枕をそばだ

て」「月毛の駒に」といった、源氏寄合に採り上げられる物語本文が踏まえられていることは注目される。又、「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしそ思ふ」（『古今和歌集』巻第九鷦鷯旅歌）の柿本人麻呂作と伝えられる歌が引かれているが、この歌は、源氏寄合と併せて『平家物語』や詠曲詞章の須磨の叙景等に屢々引かれる。

『とはすがたり』のような『源氏物語』本文に則した叙述に対し、貞治五年成立という『詞林采葉抄』（略本系）『須磨浦』の項には、沈淪していた行平を業平が秘かに須磨の浦に訪ねたとする件りがある（濁点稿者）。

：ヤガテ立別ケル時ヨメリケル、

スマノ浦秋荻シノギコマナメテ鷹狩ヲダニセデヤワカレム

曉点テ打出ケルニ、比ハ八月廿日アマリノ空ナリケレバ、晨明ノ月中空ニノコリテ、海上漫々タル銀浪千里ノ氷凜々トシテ、淡路嶋絵嶋ガ磯ハルダト見渡ルニ、：行トシモナケレドモ、玉ノ轡ヲ月毛ノ駒ニ任テ、泣々立返ケルトカヤ。又源氏ノ大将ノ、ソノカミ北闕ノ錦帳ヨリ出テ、只人トナリ玉ヒシカドモ、：此浦ニサスラヒ、松ノ柱竹ノ垣柴ノ枢ノ内ニ玉藻ノ床波ノ枕ヲシキ、忍三年ヲ送玉ケンアリサマ、短筆雑⁷記者也。此集ノ所段ナラズトイヘドモ以次載之。」

別れに際して業平が詠んだ歌からして、いかなる資料の所説とも知らず、初句から『万葉集』所載歌とは大きな改変があり、須磨浦の歌に仕立てられているが、『源氏物語』須磨巻には流滴二年目の春の源氏大将を宰相中将が訪れる件が見え、そうした物語の展開を背景にこうした所説が生まれたのかも知れない。但し、こうした『詞林采葉抄』のような所説にしても、仲秋の須磨という設定のもと、傍線部のように『とはすがたり』と類似する語句が見え、「松のはしら」「竹あめるかき」等の須磨巻源氏寄合と重なる記述も見える。

『とはすがたり』と『詞林采葉抄』を以て多くの指摘するわけには行かないが、十四世紀に成った作品における須磨・明石の地をめぐる記事中で、『源氏物語』須磨・明石巻の秋の景物等が重用される傾向は窺えよう。こうした『源氏物語』をめぐる記述と軍記文芸との接点の窺えるのが、延慶本『平家物語』（第二中）の以下の件り（「月見」の章段）である。

八月十日余ニモ成ニケレバ、新都ヘ供奉ノ人々ハ、聞ユル名所ノ月ミニムトテ、思々ニ被出ニケリ。或ハ光源氏ノ跡ヲ追ヒ、諏磨ヨリ明石

浦、吹上、和歌浦、玉嶋嶋(マツシマ)へ行者モアリ。：

「」でも須磨・明石は、光源氏と結び付け、仲秋の月を愛する地として掲げられる。「うらづたひ」の語は明石卷源氏寄合であるが、延慶本では他にも須磨より明石への浦伝いと光源氏とを結び付けている箇所が見られる。又、寿永三年春の一つ谷合戦の海上へ逃れる平氏一門に関する件にも、光源氏の名が見えることには注意を払つて置かねばなるまい。

主上ヲ始奉、ムネトノ人々ハ御船ニ召テ、思々心々ニ出給。船路ノ習

ノ哀サハ、塩ニ引レテ行ホドニ、華屋ノ里ヲ馳スギテ、紀伊地へ赴ク

船モアリ。便ノ風ヲ待得ズシテ、浪ニ漂フ舟モアリ。光ル源氏ニアラ

ネドモ、瞬磨ヨリ明石ヲ尋ツ、浦伝伝行舟モアリ。：(第五本)

源氏寄合の見える修羅能作品は、『平家物語』一の谷合戦譚に取材しているが、本説の『平家物語』本文において、僅かながらも平氏の一の谷落の様と『源氏物語』の叙述とが結び付けられていることは確認される。しかし、以下に掲げる覚一本をはじめ、平氏の一の谷落の件りにおいて、光源氏の名を掲げない『平家物語』の伝本は多い。

：塩にひかれ、風に隨て、紀伊路へおもむく船もあり。華屋の沖に潛いでて、浪にゆらるゝ船もあり。或は須磨より明石の浦づたひ、泊さためぬ梶枕、かたしく袖もしぼれつゝ、腕にかすむ春の月、心をくだかぬ人ぞなき。或は淡路のせとを漕とをり、繪鳴が磯にたゞよへば、波路かすかに鳴わたり、友まよはせるさ夜千鳥、是もわが身のたぐひかな。：(卷第九「落足」)

但し、覚一本には光源氏の名こそ見えないものの、傍線部に『源氏物語』須磨巻の秋の光源氏の謫居の様を描いた本文の影響が強く窺える。

又、東国で生成されたと言われる『源平闘諍録』(卷八下)には、以下の件りが見える(原文は漢文体表記、訓み下し、読点濁点を付す)。

薩摩守忠度岡部六矢太ガ為ニ討(タ)被玉ヌ、飯磨閑屋者忠度知行所ナレバ、行平中納言ノ跡ヲ追、常ニ彼所ヘ下被、或社堂住持僧形ノ如モ腰折ヲ為スル之間、御会毎(ニ)召(サ)被ツ、情有言(ヲ)懸カバ：

『源平闘諍録』の忠度の最期に関する件りは他諸本とは大きく異なる。須磨や行平と結び付けて平忠度を造型するのには、『源氏物語』須磨巻が関わつてよいし、平忠度の造型における貴人化とも重なる。又『平家物語』諸本の中には、『源氏物語』を介して、平氏の公達を行平や光源氏のような貴公子に重ねて造型する本も見える。

武者をシテとする修羅能において、『源氏物語』須磨・明石巻の物語内容を踏まえるという発想は、本説『平家物語』において既に窺えるものであり、源氏寄合を介して『源氏物語』の物語世界を謡曲に採り入れることを、謡曲作者達の純粹な創作と見る必要はないのである。

『源氏物語』本文を踏まえて『平家物語』に見える平氏一門の事績を謡曲化したのは、足利義満に仕えた琳阿弥作詞の曲舞謡(西国下)である。世阿弥の『五音』下に「応安ノ比ヨリ至徳年内ノ曲舞、已上」として收められている曲舞のうち、「海道下・西国下ハ、只琳阿弥作書トシテ、南阿・觀世ノ曲付也」という、玉林(琳阿弥)作詞・觀阿弥作曲の(西国下)は、世阿弥周辺の須磨を舞台とする謡曲作品に多大な影響を及ぼしている。

(西国下)は、「指声」寿永二年ノ秋ノ比、平家西海ニヲモムキ給ウに始まり、都から柄の浦辺りまでの平氏の西国落を描く。『源氏物語』須磨・明石巻と関わるのは、後半の二段グセの段の前半である。

〔指声〕かくてあるべきにあらねば、主上を初めたてまつり、みな御船に召されけり。慣らはぬ波の浮き枕、思ひやること悲しけれ、：

〔曲舞〕：須磨の浦にもなりしかば、四方の嵐もはげしくて、閨吹き越ゆ

る音ながら、後の山の夕煙、柴と云物ふするも、見なれぬかたのはれなり。琴の音に、引き留めらるゝと詠じける、「せつの君のこの浦に、心をとめて筑紫船、昔はのぼり今くだる、波路の末ぞ悲しき。

かたぶく月の明石潟、六十あまりの秋を経て、問はず語りのいにへを、思ひやる社ゆかしけれ。ふねより刺に乗り移り、暫しこゝにと思へども、須磨や明石の浦づたひ、源氏の通ひし道なれば、平家のぢんにはいかゞとて、又この岸を押し出だす。：

二重線を付した語句が、『光源氏一部連歌寄合』『光源氏一部連歌寄合之事』（内容は『光源氏一部連歌寄合』『源氏小鏡』『光源氏巻名歌』を併せ持つたもの）等により須磨・明石巻に基づく源氏寄合語と判断されるものである。細かに見れば寄合の機縁となる語は他にもあり、「月は明石の浦のすま居 横の戸口の月影」とばず語の夢も勝忘ぬ節とや成ぬらん」（『宴曲集』巻第一「月」）等、先駆となつた作品はあつたろうが、玉林によつて平氏都落と『源氏物語』須磨・明石巻は明確に結び付けられ、それを受容して世阿弥の修羅能が展開して行く。

玉林が連歌にも和歌にも虜能であつたことが指摘されており、盛行しつあつた源氏寄合を踏まえて作詞したのであらうが、『西国下』に見えるのは源氏寄合の語ばかりでない。須磨巻の五節の君との贈答や明石の巻に見える明石の人道の一間はず語り、明石の上へ通つた車（又あかしに付くるまといふ事あり。い中などなればくるまなしとおもふべからず。にうだうつくりてもちたることあり『光源氏一部連歌寄合之事』等『源氏物語』須磨・明石巻の物語展開をも踏まえており、世阿弥の作品には採り上げられていない光源氏の事績を忠実に辿つて作詞し、そこに「思ひやるこそ悲しけれ」のような歌舞中の語り手の心情表現を交えて平氏の都落に引き付けた

のであり、『平家物語』に見える平氏の都落に関わる「いくさ語り」を中心的素材としているわけではない。

(1) 世阿弥作品に見える源氏寄合——語曲〈忠度〉

語曲〈忠度〉では、下掛り系本はワキの「着キゼリフ」の「これなる確辺に一本の花のみえ候。もししく承及たる若木の桜にてもや候らん」（宝山寺藏金春禪鳳筆巻子本。以下、禪鳳本と略称）以下、中心的景物である源氏寄合「若木の桜」が示される（上掛り系の古写本にも「シカく」と「着ゼリフ」を示す本がある）。ここでは統くシテとワキの応対を禪鳳本により示す（漏点稿者。括弧内は稿者注。／は節、一は詞を示す）。

〔問答〕（わき）「いかに是なるぜう殿。御身ハ此里人にてましますか。（し

て）「さむ候此浦の瀬にて候。〔ゑ（わき）〕「あまならば浦にこそすむべ

けれ山あるかにかよはんをば山人とこそ申べけれ。（して）「是ハ御

言葉ともおぼえぬ物かな。そもそも塗人のくむ塗をバやかで其まゝ置候べきか。〔ゑ（わき）〕げにくこれハことハりなり。もしほたくなる夕

煙（して）たえまを遅しと塩木とる（わき）みちこそかはれ里はなれの（して）人音稀に須磨のうら（わき）近きうしろの山里に

〔（上哥）〕（して）柴と云物の候へバ（わき）しほ木のためにかよひく

る。（して）あまりにおろかかるお僧の御ぢやうかなやな（同音）（）
げにやすまの浦余の所にやかはるらん。それ花につらきハ。ミネのあらしや山おろしの。音をこそいとひしに。すまの若木の桜は海すこし

だにもへだてねば。かよふ浦風に山の桜もちる物を

このように、源氏寄合を交える応対で一段が構成されている。因みに、『觀世弥次郎長俊大永式年霜月十三日』の奥書のある松井文庫藏一番綴松井本（以下、長俊本と略称）等の上掛け系本では、「いかに是なる老人おこ

とは此山賤にてましますか」と、後の「山あるかたにかよんをば。山人とこそ申べけれ」とは対応しないものの、源氏寄合の「山がつめきて」と関係するワキの問い合わせであり、この段前後は〈忠度〉諸本によつて細かな異文が散見するが、その異文には寄合の使用の有無等が関わっている。

これらの源氏寄合は、『源氏物語』須磨巻の（濁点・句読点を付す）

煙のいとちかく時々くたちくるを、これやあまのしほやくならむとおぼしわたるは、おはしますうしろの山にしばといふものふするなりけり。めづらかにて

山がつのいほりにたけるしばくもことひなんこゐるさと人に基づくが、須磨巻では光源氏が海士の塩を焼くと見ていた煙は実は背後の山で柴を焚いているものであったとある。これに対し〈忠度〉のシテ浦人は、「後ろの山」へ「塩木」を探りに行くとして「塩木」と「柴」という物を同じもの、即ち「海士」と「山賤」の生業を同一視する理解を示す。

「若木の桜」をめぐるやり取りの間に、源氏寄合を交え、生業をめぐるシテとワキとの見解の違いを以て問答形式の見せ場の一場を構成しているわけであるが、こうした詞章構成から、即ち世阿弥は『源氏物語』本文や本文展開には縛られずに自由に源氏寄合を組み合わせて作詞しているとまで言いつれまい。永享四年成立の今川範政の梗概書『源氏物語提要』では、

朝夕波うちながめて、彼行平の中納言の闇ふきこゆるといひけんうらなみ、もしほたれつゝわびぬる家居、今御身の上に覺し出て涙うかべ、なみこゝもどによりたる風情にて、物悲しき折ふし、うしろの方に煙のたつを見て、たづね給へば、是なん柴焼くけぶりといへり。さては海士の塩やくならむと珍しく思召で、(歌省略)心は、しばくも人のとへかし、里人さへとはざると、さびしき御歌也。

と、後ろの山で柴を焼く煙だと聞いた源氏大将は、海士が塩を焼いている

のだと珍しく思ったという。少々不可解に感じる記述ではあるが、發想は〈忠度〉のシテ浦人と通じる。こうした記述を見ると、『源氏物語』本文と筋の異なる展開を以て、直ちに謡曲作者の創作と見ることには慎重でなくてはならない。

さて、「若木の桜」に話題を移したシテは、続く問答の段において、平忠度の詠歌「行暮で木のした陰を宿とせバ。花やよひのあるじならましとながめし人も此苔の下」を引用し、「ゆかりの人のうへ置し跡のしるしの花ぞかし」(神鳳本)として、源氏寄合「若木の桜」と忠度の墓標とを結び付ける。これは、多くの先覚によつて〈忠度〉作者の優れた創作と指摘されている点である。そして、中入に向かう「ロンギ」の小段においても「夕の花の陰にねて。夢のつけをも待給へ。都へ言伝申さんとて花の陰に宿り木の行かたしらず成にけり」(神鳳本)と、後場に語られるはずの「いくさ語り」を、明石巻の源氏寄合「夢のつけ」として提示し、「宿木」という『源氏物語』巻名を詞章に交える。世阿弥作の(教盛)における源氏寄合は後場の「クセ」の「いくさ語り」にも最も多く見えるが、〈忠度〉の場合は、詞章に源氏寄合を散りばめ、「いくさ語り」ではない小段に源氏寄合を利用することによって前場を構成しているわけである。

次に、修羅能そのものの問題とは若干離れるが、謡曲作者による源氏寄合使用の様相、或いは変容の様相を把握するため、〈忠度〉後場のワキの待詔を見る。上掛り系の長俊本では、

〔口〕ワキ詔「まづく都にかへりつゝ。カヽルヽていかに此事申さんと。〔上哥〕夕月ハやくかげるふ。く。をのが友よぶむら千鳥の。跡見えぬいそ山のよるの花に旅寝して。うら風までも心して。はるにきけばやをとす」き。須磨の闇屋の旅寝かなく

であるが、下掛け系の神鳳本では、

〔上(上哥)〕僧(わき)袖をかたしく草枕。く。夢路もさぞな入月の。

跡見えぬ磯山の夜の花に旅ねして。心もともに更行やあらしひはげしきけしきかなく(遊音抄はこに「じかく」とあり、何らかのコトバがあるらしい)と、上掛り系本とは大きく詞章が異なる。しかし、この段に関して、世阿弥の作詞した〈忠度〉の本来的本文が留められているのは下掛り系本であろう。「夢の告げ」を待つよう命じて中入りしたシテの詞章に、「まづハヽ都に帰り」「定家に此事申さん」と言うワキの詞章は対応していない。

藤原定家に告げる「此事」に当たるものは、忠度の化身と思われる老人に遭遇したことぐらいしか見当たらない。それも突然定家の名が語られる。

ワキ僧は登場段に「俊成の御内に有し者」(長俊本)とは名乗っているものの、観客は、〈忠度〉の作中時間が定家在世の時代に設定されていることを中人の段に到つて初めて知るのである。上掛り系本の待説は、「せんざいしゅの。歌のしなにハいりたれども。ちよつかんの身のかなしは。よみ入しらずとかゝれし事。まうしうの中の第一なり」(長俊本後場「クドギ」という忠度の執心を察知し、その定家にワキ僧が平忠度の靈の出現を告げれば、『源平盛衰記』巻第三十二に見えるような定家が平行盛の実名を掲げて『新古今和歌集』に入集させた話(非當道系『平家物語』諸本にのみ見える)等のように、定家に忠度の執心が届けられるであろう、このようなことまでを即座に想起するという、謡曲作者と観客との共通理解を前提としなければ成り立たない。上掛り系本のような詞章での演能が可能となつたのは、〈忠度〉が観客に馴染みのある演目として定着した後のことである。或いは中入り後の間狂言による「語り」が簡素なものではなく、ある程度詳しい忠度に関する「いくさ語り」を語り、前場と後場との接続をするアイの「語り」の形態が整つたからであろう。

又、上樹り系本の「うら風までも心して。春にきけばやをとす」(き)は、

浦風が激しく吹きつけているのかどうか少々解釈し難く、諸注釈書も見解は様々であるが、「うら風までも心して」の詞章は、後シテ忠度登場段の「いまのでいか君に申。かかるべくハさくしゃを付てたび給へと。ゆめ物かたり申に須磨のうら風も心せよ」(長俊本「(クドキ)」)の詞章とは対応していない。下掛り系本のよう、「あらしひはげしきけしきかな」という浦風が激しく吹きつける作中場面に忠度の靈が登場してこそ、「夢物がたり申に須磨のうら風も心せよ」(禅風本)の詞章は成り立つのである。

以上の点から、上掛け系本の待説の詞章は本来的な本文ではなく、改変が施されていると思われるのであるが、そこにも、「須磨の関屋の旅寝かな」と、『源氏物語』の巻名「関屋」が見え、「夕月へやくかげろふの。をのが友よぶむら千鳥のは」は、須磨とは関わりのない大和国の歌枕を持ち出しつつも、『源氏物語』の巻名「蜻蛉」を交え、須磨巻源氏寄合である「友千鳥」を導き出す序とされており、源氏寄合や『源氏物語』巻名を探り入れるべく、意図的に改変が試みられているのである。

しかし、下掛け系本・上掛け系本何れにしても、後シテを迎える待説は、光源氏の須磨流誦直後の「おはすべき所は…うみづらはやゝいりてあはれにすゞげなる山中なり」や、「すまにはいとゞ心づくしの秋風に、うみはすことをけれど…ひとりめをさましてまくらをそばだてゝよものあらしきをきゝ給になみたゞこもとにたちくる心ちして」といった『源氏物語』本文に基づく「あはれにすゞき」「四方の嵐」といった須磨巻源氏寄合と関わる詞章である。シテ忠度は、「さむる心へいにしへにまよふ雨夜の物がたり。申さむために、(んばくにうつりかはりて來りたり」(禅風本「サシ」と、『源氏物語』帝木巻に基づく詞章でこの場に登場する。

平氏の都落を語る「いくさ語り」(禅風本に拠る)で、

〔下(下哥)〕(同音)としハ寿永の秋の比都を出し時なれば

〔上(上哥)〕(同音)さもいそがはしかりし身の。心の花からん菊の。
 きつね川より引かへし。どなりのいゑにゆき歌ののぞみをなげきし
 に。のぞみたりぬれば。又弓箭にたづさハリて西海の浪のうへしばし
 とたのむ須磨の浦。源氏のすみ所。平家のためハよしなしとしらざり
 けるぞハかなき

と須磨を「源氏の住み所」と語るのは、『源氏物語』の物語展開を念頭に
 置いてのことであるが、傍線部の詞章は全て山舞(西国下)に同じ詞章や
 類似の発想の見られるもので(西国下)を受容したものと見える。しかし、
 これ以降の〈忠度〉の「いくさ語り」には源氏寄合が見えない。この点が
 後場の「いくさ語り」にも源氏寄合を重用する(敷盛)とは大きく異なる。

但し、〈忠度〉の「いくさ語り」には、シテの造型をめぐって他の修羅
 能と比べても特異で作者による創作の濃厚とされる詞章が先覚により指摘
 されている。以下の二点の創作については、『源氏物語』須磨・明石巻の
 展開、或いは源氏寄合との関わりを認めるべきではないかと考えられる。

一の谷合戦におけるシテ忠度の最期を語る「いくさ語り」では、

〔(哥)〕同音(六)六やた心に思ふやう。いたハしや彼人の御しがひを見
 たてまつれバ其としもまだしき。長月比のうすぐもり。ふりみふらず
 ミ定なき。時雨ぞかよふ村もミぢの。錦のひたゝれハたゞよのつねに
 よもあらじ。…

とある。『平家物語』における壯年の平忠度の人物像とは異なり、シテ忠
 度を年若い武者としており、これは世阿弥の創作として諸注釈書等で指摘
 されている。(一)で注目したいのは、文飾として用いられる「長月」「時
 雨」「斑紅葉」である。春一月の一の谷合戦において討死した忠度の「い
 くさ語り」に、晚秋を想起させることばが用いられているのである。

先に「年は寿永の秋の頃」と語ったのは、都落に際して藤原俊成を尋ね

たことを語るために、一の谷合戦における最期を語る「いくさ語り」
 と直接には繋がらない。但し(敷盛)の「クセ」にも、

〔クセマイ(クセ)〕…寿永の秋のはのよものあらしにさそハれ散々になる
 一ようの。舟にうき波にふして夢にだにもかへらず。らうてうの雲を
 ひ。きがんつらをみだるなる。空さだめなき旅ころも。日もかさな
 りて年月の。立かへる春の比此一の谷に「もりて」しばしハ爰にすまの

うら…(松井文庫藏一番綴本)

とあるように、寿永二年秋の平氏の都落から翌年春の一の谷敗走までを一小段の詞章に構成したことは、平氏の没落を一つの流れとして捉え、作中に秋と春の景物を同時に構成することを可能としたはずである。又、〈忠度〉のこうした詞章には、前節に確認したような、須磨の地の秋のイメージの共有が見所にも期待される、或いは後場の待説からシテ登場段に、「よものあらし」「ともちどり」等の須磨巻の秋の源氏寄合が組み入れられてゐる、等の作詞上の構想を想定しなくては考え難い。

そしてもう一点、結末のシテの、

〔(哥)〕同音(六)…御身此花の陰に立より給ひしを。かく物がたり申さん
 とて日を暮しとごめしなり。今ハうたがひよもあらじ。…

の詞章は、シテ忠度が通力であたりを暗くしたと解すべきだとした見解が多い(日本古典文学大系『語曲集』補注等)が、仮にここにシテの靈威が込められているとすれば、それは『源氏物語』において須磨から明石へ光源氏が移る機縁となつた風や住吉明神の靈威、又故桐壇院の夢告といった超然的な事象に關係していよう。前シテが「夢のつけ」を待つようによと告げて中入りしたのは、こうした『源氏物語』の物語展開を踏まえてのことと考えられる。世阿弥による源氏寄合の使用は、見所における源氏寄合をめぐる共通理解の上に成り立つものであると言えよう。

以上、『忠度』には、前場における源氏寄合を転用しての段構成、後場における『源氏物語』や源氏寄合を基とした創作等、世阿弥による修羅能における源氏寄合使用の多様な手法が窺えるのである。

(三) 語曲『知章』と源氏寄合

『知章』には、応永三十四年久次署名の能本が生駒宝山寺に伝存しております、世阿弥の晩年期には成立していた。『知章』に源氏寄合が多く見えるのは、後場の待詔からである(久次本は片仮名表記であるが平仮名に改め、適宜濁点・句点を付す、「」は原本の虫損を他本により補った箇所)。

【上哥】(ワキ) ゆうなみちどりともねして。く。ところもすまのうら

【下句】(ウタハ) やまのかぜもさえかえり。心もすみのころもでに。かの御

きやうをどくじゆするこの御きやうをどくじゆする

『連珠合璧集』にも「千鳥トアラバ、さ夜ぢどり 友ちどり・夕浪 友なし
跡 浦づたよし」と見えるように、源氏寄合ばかりでなく、他の連歌寄合書にも見える寄合を連ねている。後シテ登場段は、久次本に、

【一セイ】(シテ) うかむべき。なみこゝもとやすまのうら

同(同音) / うしろのやまかせ。上のあら

とあるが、他諸稿本には、「波二二もとや須磨の浦」に続き、「海す二しあるかよひ路の」(法政大学能楽研究所蔵金春喜勝冊子本)、「海す二しあるかよひ路の」(松井文庫蔵一番綴松井本)の源氏寄合を含んだ一句がある。又、「上野の嵐」は、「須磨ニハあかし 上野うしろの山浪ニムもと 山かけ」(『連歌付合の事』)等のように、須磨に関わる寄合語として用いられたようだ。(敦盛)の詞章にも見える。

続く後シテとワキの応対の段は、

【(掛け合)】…トモ(シテ) / ところもさすが ソウ(ワキ) / すまのうらに

【上哥】同(同音)をぼろなるかりのすがたやつきのかを。く。うつす

えじまのしまがくれ。ゆくふねををしとぞをもうわがちゝにわかれし
ふなかげのあとしらなみもなつかしや。::

とあるが、『知章』には語曲『松風』の詞章との関連が窺え、この「上哥」に見える源氏寄合は、次に掲げる『松風』のシテ 松風とツレ村雨の須磨の地での詠嘆の詞章を踏まえてのものと思われる。

【サシ】(シテ) 面白や慣れても須磨のゆふまぐれ。あまのよび「あかすかにて。沖にちいさきいさり舟の。影かすかなる月のかほ。かりのすが

たや友千鷗。のハきしほ風いづれもげに。かかる所の秋成けり。あら

心すこの夜すがらやな(観世元広奥書本)

『知章』の作中時間は春であるが、『松風』に「かかる所の秋なりけり」とあり、『知章』はこれらの須磨の秋に関わる源氏寄合を詞章に引用し、

知章の父平知盛の一の谷落ちを語る「いくさ語り」の詞章においても、「(上)(クリ)」(同音)さでもそのときのありさまかたるにつけてうきなみ。たつたの山のみぢばの。くれなゐなびくはたのあし。ちらぐ

になるけしきにて…

と秋を想起させる。先の「上哥」の「うつす絵鳴の嶋隠れ…」は、世阿弥の『五音』下冒頭「闌曲」の項の注記に、人麻呂の歌を引いて「ホノボノト明石ノ浦ノ朝霧ニ島ガクレ行船ヲシソ思フ闌曲ノ姿歟。」とあるのを引いたものであり、こうした季節を転化された源氏寄合の使用は、前節に見た世阿弥の『忠度』が既に成立してひろく鑑賞され、須磨の地における秋のイメージの定着があつてはじめて可能であった筈である。

なお、「上哥」に見える源氏寄合「つきのかを」と「かりのすがた」について、月も雁も、須磨・明石両巻本文に散見する景物であるものの少々疑問がある。「つきのかを」は、『山頂湖面抄』の所説ではこの

歌は須磨へ下る前の京での花散里との贈答歌を指すものであり、須磨の地とは直接は結びつかないが、源氏寄合とも関係の深い須磨巻『光源氏巻名歌』「すまの浦うき世にしに行月もぬるゝかほなる袖の上哉」との関連も考えるべきかと思う。又「かりのすがた」について、加藤洋介氏は、『源氏物語』別本の本文のみ拠り所となつた本文が見られることを指摘しておられる。こうした点からも、謡曲作者は『源氏物語』本文を直接に参照して引用しているわけではないことが窺える。

後シテ知章の靈の「仮の姿」が掛けられていることが明白な「かりのすがた」に対して、「つきのかほ」は理解され難くなつたのか、上掛り系では明暦三年初夏外組本あたりから「月のかけ」と改変する本が見られ、現行観世流詞章に至つてはいる。但し、「月の顔」は歌語としても例は少ないと、正徳には『草根和歌集』に「月のかほ花の姿にいにしへのおも影のこすすまのうら浪」(寄花雜一四八九番)等、五首の例が見え、正徳に師事した歌僧正広にも「すまのうらや昔よひの月のかほ國もかはらぬ岸にぞみる」(『松下集』十五夜月一七八六番)の詠がある。「月の顔」が須磨の地に関わる寄合として珍重されていたことを示していよう。

ここまで〈知章〉後場の詞章における源氏寄合を見てきたが、その源氏寄合は、先行して成立していたであろう世阿弥関連の『松風』(須磨源氏)、『忠度』(敦盛)等の作品に見えるものばかりである。しかし、〈知章〉における源氏寄合は、先行作品の転用、二次的使用にはとどまらない。これに関連して、〈知章〉前場の「いくさ語り」を考えたい。

『世子六十以後申楽談儀』(別本闇書)に「平家二、心得又節ノ付ケヤウアリ。」(コノ馬、主ノ別レヲ惜シムト見エテ)ト云所ヲ三重ニ繰ル。カヤウノ所ヲバ言葉ニテ云テ、タトヘナドヲ三重ニ言ウハヨシ」と見える中の引用詞章を曲中に含む〈知章〉は、世阿弥の言葉に忠実に、

〔語り〕「いやばしやうにて候し。いのうえぐるとてくきやうのめいばなりしほどに。廿よちやうのうみのをもやすくとをえぎわたり。ぬしをたすけし馬なり。されどせんちう所なかりしほどに。をいかえされしが。しばしが程は船のあたりををえぎめぐりしかども。のするひともなかりしほどに。もとのみぎわにをえぎあがり。此馬ぬしのなごりををしむとみえて。をきのかたにむきたかいなゝきをし。あしがきをしてたちたりけり。

と『平家物語』から引用した、井上黒についての「いくさ語り」をコトバで語り、以下の詞章が続く。

〔下哥(哥)〕同(同音)くえてうなんしにすをかけ。こまほくふうにいばえしもきうがうをしのぶゆえなりとか。こばわほくふうをしたい。此馬わにしにゆく船の。ともつなにつながれてもゆかばやと思けしきなり『文選』に見える「胡馬依北風、越鳥巢南枝」を引用した「越鳥南枝に巣を掛け、胡馬北風に嘶えし」(校訂)に注目したい。「胡馬北風に依り」と『文選』の訓みとは小異があり、詩句の上下も入れ替わっているが、これは、『三道』等の記述により世阿弥作と知れる謡曲(蟻通)の詞章に、かかる奇特に逢坂の、閑の清水に影見ゆる、月毛の此駒を、引き立てみればふしきやな、もとのごとくに歩みゆく、ゑつてう南枝に巣をかけ、胡馬北風に嘶へたり、歌に和らぐ神心、たれか神慮の、まことを仰がざるべき。(『五音』下「闇曲」所引(蟻通)「クセ」に拠る)と、〈知章〉と同じ詩句の形で見える。(蟻通)は、蟻通明神をめぐる紀貫之の歌徳説話に取材した謡曲であるが、この『文選』の詩句は、動けなくなつた馬が蟻通明神の勘気が解けて嘶くという、「嘶へたり」を導く序としての辞句であり、『文選』の詩句がここに唐突に引用される。〈知章〉の作者は、はたして(蟻通)の詞章から転用したのであるうか。

〈知章〉でも「越島南枝に巣を掛け」は序に当たるが、『文選』の詩句の北方の故郷を慕う馬の様を、西に落ち行く主人知盛を慕う馬の様に重ねている。詞草構成の巧拙の評価は別として、『蟻通』に比せば、『文選』の詩句を詞草に活かす〈知章〉作者の意図が窺える。『蟻通』と詩句の形は一致するものの、〈知章〉のこの詩句の引用は、単に『蟻通』からの引用とは考えられない。それは、『光源氏一部連歌寄合』等の須磨卷寄合に、「くろ駒」の語が見えるからである。この「黒駒」は、須磨流謡二年目の春に、源氏大将を慕つて懇意に訪れた宰相中将に對して、源氏が返礼に贈つた馬であり、都を思つて源氏と名残を惜しみつつ世間を憚り帰京する頭中将の交錯する思いを象徴する。『連珠合璧集』にも「黒駒トアラバ、甲斐すま」と風にあたりて」と見える。そして又、須磨卷の当該の件を注した室町期の『源氏物語』梗概書・注釈書には、『光源氏一部歌』（享徳二年成立）「世にありがたきげなる御馬のさまなればいみじくおぼされぬべけれど風にあたらばいばへぬべければ申給ふ心はあつてうなんしにすをくい胡馬ほく風にいはうと云詩の心也」、『尋流抄』（室町中期成立）「風にあたりて 越島南枝胡馬嘶北風」等、『文選』詩句が、〈知章〉の詩句と合う形で引かれているのである。下句は、既に平安後期成立の『源氏歌』において「胡馬嘶北風 文選」と、『文選』とは異なる字句で引かれておた。室町期の注釈書類もそうした延長にあるはずだが、管見では詩句の上下が入れ替わるかたちの引用は、室町期の資料である。こうした資料を見る如き『源氏物語』享受を介して、知盛の愛馬である黒馬井上黒から、須磨卷の源氏大将の贈つた「黒駒」へと連想が働いたと見て間違いないまい。

なおも中世の『源氏物語』諸資料との関わりを追究する余地はあるが、この点には、単に先行する世阿弥作品に見える源氏寄合の転用、二次的使用には留まらない、〈知章〉の『源氏物語』受容が窺える。

〈知章〉において源氏寄合が見えるのは、後場の後シテ知章盡の登場段と、前場の前シテの井上黒にまつわる「いくさ語り」の結びである〔下哥〕の小段である。源氏寄合は、いわば後シテの「いくさ語り」の序に当たる諸小段において、作中場面を構成する詞草に引かれているわけである。ところで、右の『蟻通』の「逢坂の闕の清水に影見ゆる月毛の此駒」とは、「貫之集」等に見える「逢坂の闕の清水に影見ゆる月毛の此駒」とは、『貫之集』（題詞「八月駒迎」）の紀貫之歌によるものである。シテが貫之である『蟻通』にこの歌が引かれるのは不思議ではないが、「影(鹿毛)見ゆる月毛の駒」が、何故「月毛(鶴毛)の駒」とされているのか不可解である。ここで想起されるのは、『源氏物語』明石巻で都を慕つて光源氏が詠んだ「秋のよの月げのこまよわがこゑる雲ゐをかけれときのまもみん」の歌である。「月毛の駒」は、『光源氏一部連歌寄合之事』に「さてこそ月げのこまといふ事あかしに付て」とされており、文安六年の『山頂湖面抄』で比丘尼祐倫は、藤原定家詠とされる「あかしがたゞく水鶴のあたら夜は月げの駒のまきの戸口か」の明石巻『光源氏巻名歌』に注を施したことばでもあり、源氏寄合であつたと見える。『蟻通』の話材が『源氏物語』と直接に結びつく理由は今は分からないが、修辞的な引用とはいえ『源氏物語』との関連が窺える。世阿弥周辺における『源氏物語』受容の様相は、字句単位で見れば、更に抜がるのである。

(四) 語曲〈簾〉・〈河原太郎〉と源氏寄合 ——「いくさ語り」における源氏寄合の引用

〈簾〉は、近年発見された『応永三十四年能番組』により応永三十四年

二月九日に觀世元雅が演じたことが確認された。久次署名本の伝存する「知章」と、丁度同時期の資料に見えるわけである。

この「瓶」は、上掛り系本では次の詞章から始まる（鴻山文庫藏觀世小次郎元頬節付本。以下、元頬本と略称）。

〔次第〕（）春を心のしるべにて。く。うからぬたびにいでふよ

「これと同じ〔次第〕の詞章を以て始まる修羅能に、「知章」と「重衡」とあるが、下掛り系本（六徳本は除く）は、この〔次第〕を持たず、鴻山文庫藏「動塵録」本（瓶）（江戸中期写）のよう、「觀世」□知章ノ次第ヲウタウ」との注記が見える本もある。続く、ワキ僧の名乗りは、

〔名ノリ〕ワキ僧「かやうに候者へやくしがたより出たる僧にて候。わ

れいまだ都をミズ候ほどに。此春おもひたちミやこにのぼり候
であり、久次本（知章）のワキ僧名乗の詞章とよく似ている。

〔コトバ（名ノリ）〕（）「これわざい」^{西國}くがたのしやもんにて候。われいまだはなのみやこをみず候ほどに。このたびひんせんをこいたゞいまか
いるにをもむき候

（瓶）の諸本により「筑紫方」と「西國方」の両型があるが、これは（知章）諸本も同様であり、上掛り系本の一番綴松井本では、「筑紫がたより
いでたる僧にて候」とある。続くワキ僧の道行は、（瓶）では、
〔上哥〕（）たび心づくしのうみの船出で。く。八重のしほぢをは
るくとわけこしかたの雲のなみ。けふりも見えし松原の。里の名と
へべ。すまのうら。いく田の川にも付にけり（イクタ川ニモけニケリ）

であり、（知章）は、
〔上哥〕（）たび心づくしのうみのしをぢをはるべとなをすえありとゆくな
みのくもをもわくるをきつなみ（淵田本「沖つ舟」）われもうきよのみ
ちいでいづくともなきうみぎわやうらなるせきにつきにけりく

である。（須磨源氏）にも同様の〔次第〕があるが、両曲は、筑紫より海路での道行であり、似たことばが散見する。（須磨源氏）は作者や成立時期について諸説あり、位置づけの難しい曲であるが、須磨卷源氏寄合が詞章に散見する。修羅能作品に見える源氏寄合が、（須磨源氏）の詞章からの転用である可能性も想定する必要はあろう。

ところで（瓶）（知章）共に、「上哥」冒頭に明石巻源氏寄合「旅衣」の語が見える。（瓶）元頬本の「たび衣」は、「たび心」を訂したものであるが、上掛り系本では天理図書館蔵一七二冊本他では「たび」「ゝろ」とし、鴻山文庫藏小宮山藤右衛門元政本他では「旅衣」、下掛り系本の多くは「旅
「ゝろ」である。野坂家藏三番綴謡本・六徳本では「旅衣」であり、室町期謡本では、両方の形が見える。一方、（知章）諸本には、「旅心」とする本は見当たらない。「旅心」の語は耳慣れず、「八重」「はるばる」との縁語関係から見ても「旅衣」が妥当であるかに見える。

尤も、（瓶）のこの異同は、「衣」と「心」の類似の書体による誤写等が原因の単純な異文と考えられようが、「旅心」の字句が受け継がれるのは、源氏寄合との関わりがあるようである。「上哥」に見える「心づくし」は須磨巻源氏寄合であり、「舟として」は明石巻寄合である。又、勢田勝郭氏^{〔2〕}は、「旅心」とは、『看聞日記』紙背連歌（応永二十五年十月二十五日「何船十五」）に「鐘きくまくら夢ぞすくなき秋よりもねざめはことに旅」と見え、応永期の連歌に用例が遡ることばであるとされる。「すまにいと心づくしの秋風にうみはす」とをけれど等の『源氏物語』須磨巻の展覧を背景に、源氏寄合等の連歌の用語が採り入れられ、「旅心」「心

又、（瓶）や（知章）のワキ僧は、忠度のワキ俊成に仕えた者や（敦

盛」のワキ蓮生法師とは異なって、その出自の設定が作中の「いくさ語り」とは無関係でありながら、西国筑紫方より海路により赴いてきた僧といふ設定がなされている。これには、先に掲げた曲舞「西国下」にも見えた『源氏物語』須磨巻の太宰大式・五節の君一行の上京等が想起される。「筑紫方より出たる僧」というワキの設定は、源氏寄合の詞章への引用の延長になされたものと考えられる。(腹) のワキ登場段をめぐる諸本間の異文にも源氏寄合が関わっているよう。

『平家物語』本文に拠る限り、(腹) はシテ梶原景季が一の谷の平氏陣の大手生田側に向かった源範頼に従つたので、生田が舞台に設定されているのである。しかし、(知章) は、シテ知章が身替わりとなつた平知盛は大手生田の森の将軍であり、敗走したとはいえ、実のところ、『平家物語』本文に須磨を舞台にする必然性は認められない。しかしそれはともかく、(知章) が須磨浦を舞台とするのに対し、(腹) は、須磨には近いとはい、生田を舞台とするのである。その(腹) の「上哥」の方に、(知章) 以上に源氏寄合との関連が窺えるのはどういうわけであるうか。

謡曲「求塚」のワキ西国方より出でたる沙門の道行に、

〔上哥〕ワキ／旅衣人重の潮路の浦伝 旅衣人重の潮路の浦伝。舟にても
行く旅の道浦山かけて遙々と。明石暮らして行くほどに、名にのみ聞
きし津の国の生田の里に着きにけり

とある。一つには(腹) に、こうした同じ生田を作中場所とする「求塚」の詞章との関連が随所に伺われることから、「求塚」から詞章を転用したが為に両曲の詞章が類似すると見られる。生田を舞台とする「求塚」には、この「上哥」の詞章以外には、源氏寄合との関連は見当たらない。ところが、(腹) にはこの後の「いくさ語り」の詞章にも源氏寄合が多く見える。〔サシ〕：下シテ／そうじてこのじやうの。下同(同音) 前ハうみうしる

盛」のワキ蓮生法師とは異なって、その出自の設定が作中の「いくさ語り」とは無関係でありながら、西国筑紫方より海路により赴いてきた僧といふ設定がなされている。これには、先に掲げた曲舞「西国下」にも見えた『源氏物語』須磨巻の太宰大式・五節の君一行の上京等が想起される。「筑紫方より出たる僧」というワキの設定は、源氏寄合の詞章への引用の延長になされたものと考えられる。(腹) のワキ登場段をめぐる諸本間の異文にも源氏寄合が関わっているよう。

〔クセマイ(クセ)〕〔同音〕時しもきさらぎじやうじゅんの空の事なれば
須磨のわが木のさくらもまださきかぬるうす雪のさえかへる波^(カ)も
とに。いく田のをのづからさかりをえて。かつ色^(ミ)する梅がえ。いつ
けひらけてハ天下のはるよと。いくさのかどでをいはふ心の花もさき
かけぬ。…のりよりよしつねの。おうてからめでのうミ山かけてすま
の浦よもをかこみておしよする…

〔同音カラ〕うしろの山まつにむれ入ハ残の雪の白たへにねぐらをたゞむ
まな竈の。…あらしもなみもすまの浦のにも山にもいぎよする。…
何れも(忠度) や(教盛) に見える源氏寄合の転用と思われるもので、
(腹)において新たに用いられた源氏寄合は見られないが、聽かせ所である曲舞の段に須磨巻に基づく源氏寄合がこれほど多く引用されていることは注目すべきである。稿者はかつて(腹) の曲舞の段の詞章は、『平家物語』本文の引用を交えたシテ景季の事績とは直接関わらない「いくさ語り」であることを述べたが、景季に關わるわけでもなく、作中場面である生田を謡いながらも、須磨巻の源氏寄合を散りばめて詞章が構成されている。これは須磨巻源氏寄合が、聴かせ所である「いくさ語り」を構成する要として引用されたことのあらわれと考えられる。生田を舞台としつつも、道行の段から須磨巻源氏寄合を構成しているためなのである。

しかし、須磨巻源氏寄合を重用する意図が窺えるとはい、(腹) は、シテ梶原景季が腹に梅を挿して出陣したとする話に取材する修羅能であり、生田の梅を統一イメージとして詞章が構成されているのである。その(腹) で、何故須磨の若木の桜に触れるのか、判然としない。後場の「い

くさ語り」では、シテ梶原景季が簾に挿した梅を、「もとよりミやびたるわかむしやあひあふわか木の花かづら。かくればゑびらの花もげんたもわれさきかけん」と語つてゐるのである。このように〈簾〉に梅と桜と双方のイメージが語られることについては、例えば『梵灯庵袖下集』の、

一須磨の山里に、梅と菊とをより合に付る事、行平の中将殿、源氏より三年さきに須磨の山里に住給ひける時、梅をうゑ、菊を植給ひて詠給ふによりてこそ須磨のより合なれ。

行平の母、

須磨の浦春の山里おもひ出て都の梅の袖の香ぞする

千年とも是をも云ん秋ごとに菊を植見る須磨の浦人

とある件等との関連も想起されよう(歌は省略されているが『宗祇袖下』にもほぼ同じ内容が見える)。拠り所となる所説も行平歌とされる歌も出典不明であり、『源氏物語』本文とは別に、寄合等が結びついて新たな説を生んでいる背景がありそうだが、こうした付合には梅と菊という植物に象徴される須磨の地の春と秋の季節への注目が見て取れる。行平が植えた

「梅」とは、光源氏の植えた若木の桜が喧伝され転化したものと考えるが、

これに関連して『源氏物語提要』には、「日数もやうやく移るまゝに、竹のかき、松の柱などして、庭には梅の古木、若木の桜、小柴垣、やり水、たて石、心有さまにしつらひて住給ふ」と、若木の桜以外にも光源氏が梅を植えたとするなど、『源氏物語』須磨巻には見えない記事がある。又、『源氏物語提要』の所説は、室町末期成立かという『源氏大綱』の一本『源氏大概真秘抄』にも、「されども庭に梅をうへ、わかきの桜など、小柴垣、やり水、立石などしつらふてよしあるていに住給ふ」と受け継がれ、「若木の桜」ばかりでなく、いつの頃からか須磨の地に「梅」のイメージが付されるに至っている。「竹の垣」「松の柱」「小柴垣」等は早歌の詞章に散

見することばかりであり、「若木の桜」や「梅」等についても、室町期の寄合書や『源氏物語』梗概書における所説が関わっていることを想定する必要はあるが、広く中世の歌謡資料等を探索していく必要もあるう。

次に〈簾〉に関連して、謡曲『河原太郎』を見たい。『河原太郎』は、典拠や「クセ」前後の詞章構成等に〈簾〉の影響が見られ、『河原太郎』の詞章にも、〈簾〉と似た源氏寄合引用の事情が窺えるからである。

謡曲『河原太郎』は、一の谷合戦における大手生田側の河原太郎高直・

次郎盛直兄弟の先陣・最期を語る「いくさ語り」を核とする修羅能であるが、〈簾〉と同じ生田を舞台とするものの、ワキの名乗り・道行は、

〔詞(名乗り)〕 わき 「是は東国方より出たる僧にて候。我此程ハ都に候

ひて。洛陽の寺社残なく拝み廻りて候。又是より西国修行と志候

〔上(上哥)〕 (わき) 鳥の音もまだ夜深きに旅立て。く。淀の繼橋見渡

せば。山本霞む。水無瀬川雲も猪名野の夕日影。西の宮居ハそなぞ

と。みかげの森の陰過て生田の里に着にけりく。(大理図書館蔵京都下村家旧藏番外謡本集)

と、都より生田へと至るので須磨の地に立ち寄ることもなく、源氏寄合に關わることばも当然見当たらない。『河原太郎』の前場は、「生田の昔おもひ出の。我身捨けん撫津國の生田の河は。名のミ成けり」と、『大和物語』所収歌ではなく、謡曲『求塚』に見える語句で歌を引き、他にも『求塚』の詞章を引用することで、生田の地のイメージを詞章に構成している。

しかし後場の後シテ河原太郎の幽靈による「いくさ語り」では、「げにや所も須磨の浦に。源氏のよるべへ安かりなん」と、『西園下』の一節「須磨や明石の浦づたひ、源氏の通ひし道なれば平家のちんにはいかがとて」や〈忠度〉(上哥)の「しばしとたのむ須磨の浦、源氏のすみ所、平家の

ためにはよしなし」と同じく、光源氏の須磨謫居に基づく一句で須磨の地に目を向ける。曲舞の段では、

〔クセ(下曲)〕(同音)去程に平家には、二月四日の日ハ。故相國の忌日とて。福原にてかたのごとく。仏事をなされけり。都ならばさも社あらんずらんと。皆人涙を流しけり。須磨の浦風の哀世中ぞ悲しき。……上(して)既七日の曙に。同(同音)皆打立て数千騎ハ。我もくと進けり。行人征馬にをとなひ。須磨の立浪四方の嵐。上野の春風朝日彫。紅驛く旗の足。天にかゝやき地に満て。帝釋修羅の戦ひも。かくやと思ひしら旗を。なびかすハさながら白雲のおほぶ成べし
と須磨に関する寄合を交え、「たちくるなみ」『光源氏一部連歌寄合之事』・「上野」『連歌寄合之事』、須磨の地の形容を援用した「いくさ語り」となっている。結末の河原兄弟の討死を語る「いくさ語り」は、『平家物語』の河原兄弟譚に拠るもので、須磨に關わる詞章は見出せない。

〔クセ〕の詞章の構成法からも、〈河原太郎〉は〈瓶〉の影響を受けて成立した作品と見られるが、生田を舞台としつつ、世阿弥作品等に既に見える源氏寄合を引用して須磨の叙景を交えて「いくさ語り」をするのは、〈瓶〉と〈河原太郎〉とに共通した源氏寄合引用の手法である。

(五) 修羅能の展開と源氏寄合

春という作中時間のもと展開する〈忠度〉〈敦盛〉の「いくさ語り」において、平氏の都落から一の谷合戦までが一連のものとして捉えられており、その延長上に秋の景物の描写、及び秋の景物に関わる文飾が譚章に加えられる余地が生まれたかと推定したが、これは、西村聰氏が〈須磨源氏〉の構想をめぐって、「秋の月と春の花の、季節の分裂というより、須磨巻の二つの場面(仲秋の光源氏の都思慕の場面と翌春の宰相中将の須磨慰問

の場面を指す)の統合が図られているのであろう」と論じられた如き、須磨の地のイメージが関係するのかも知れない。

こうした〈忠度〉や〈敦盛〉における須磨の地における秋に関わる詞章を経なくては、〈知章〉のように、源氏寄合を多用した秋を思わせる後シテ登場段等の詞章は成せなかつたはずである。本稿では、〈知章〉と世阿弥の語曲作品や世阿弥の能楽論の記述との関係にも触れたが、この点からも〈知章〉が世阿弥周辺において、世阿弥の修羅能能作に倣おうと努めた説曲作者の作である可能性はある。久次本〈知章〉の世阿弥自筆説が否定されて以来、〈知章〉の作者について採り上げられることは稀である。しかし、『応永三十四年演能番組』により〈瓶〉が観世座の所演曲であったことが確認された現今、〈瓶〉〈知章〉共に世阿弥作品に見える源氏寄合を引用し、酷似したワキ登場の詞章を持つ作品の成立が無関係とは考え難い。〈瓶〉の諸本の道行に多くの異文が見え、又〈瓶〉が生田を舞台としつつ、須磨巻の源氏寄合を多数詞章に用いている点からは、〈瓶〉が〈知章〉以上に源氏寄合を重用した作品であることが明らかである。

これに関連して注目されるのは、〈知章〉と〈瓶〉の「いくさ語り」をめぐる源氏寄合引用の手法の相違である。〈知章〉の「いくさ語り」は『平家物語』本文を引用する形の語りであるが、「いくさ語り」の直前の段や末尾に源氏寄合が用いられているものの、「いくさ語り」の語りの中に源氏寄合が交えられることはない。一方〈瓶〉では、曲舞の段の「いくさ語り」に源氏寄合が多く引用されている。曲舞の段の「いくさ語り」に源氏寄合を多用するのは〈敦盛〉に特徴的である。〈敦盛〉の「クセ」は舞台である須磨の叙景とシテ敦盛をはじめ平氏一門の悲哀が重ねられた詞章となつてはいるが、〈瓶〉は生田の梅を交えながら一の谷の源平両氏の陣容を語る「いくさ語り」の「クセ」全体に源氏寄合を多数交えているものの、

それはシテの内面心理と重なる「いくさ語り」ではない。

安達敬子氏は、室町期の『源氏物語』諸注釈・梗概書の検討を通して、応永期が源氏寄合の秘伝的発展をなした時期であつたことを指摘され、「むしろ源氏寄合は、純正連歌よりも他ジャンルの文芸の場にその活動の意義を移しつつあつたのではないか」として、(忠度)他の謡曲作品における源氏寄合の使用について指摘しておられる。世阿弥は「又、言葉優しくして、貴人・上人の御慣らはしの言葉づかひをよく習ひうか」として、かりそめなりとも口より出ださんずる詞の優しからん、是、詞の幽玄なるべし」(『花鏡』「幽玄之入堀事」)と述べている。応永期における源氏寄合を歓迎する風潮が将軍家周辺の観客層にもあり、謡曲作者にとつて源氏寄合が歌語と同様に重視されるに至つた。そうした歌語に準ずる寄合は、「クセ」等の聽かせ所の詞章の中心的素材として重視されたということではなかろうか。(瓶)や(河原太郎)の曲舞の「いくさ語り」はシテの事績とは直接の関係を見出し難い内容であるが、こうした「いくさ語り」における源氏寄合の引用は、源氏寄合を詞章に構成すること自体が観客の興趣に叶つていた。何れも資料に乏しく、現段階では推論の域を出ないが、応永期連歌の実作の検討と併せて、今後も室町前期の能作環境を追究して行かねばなるまい。又(河原太郎)は、著名とは言い難い『平家物語』の河原兄弟譚に取材しているが、謡曲作者は、こうした合戦譚をも素材として求め修羅能を作っているのである。修羅能作品に一の谷合戦譚に取材した作品が多いことは、須磨・明石源氏寄合を作品に採り入れることに積極的な謡曲作者が、素材の合戦譚を求めて須磨・生田周辺の合戦譚に注目したという背景も想定されよう。

新たな『源氏物語』のことばの使用や、(忠度)の前場のような源氏寄合

を利用してワキ・シテの応対段を構成してみせるというような手法が見出せない。特に(知章)や(瓶)では前場にも「いくさ語り」の段が設けられ、源氏寄合等を利用して須磨の地の叙事等を内容とする特徴的な段構成がなされていない。こうした点からは、世阿弥周辺の謡曲作者にとつて、作中場面を創造することがいかに難しく、技量を必要とするものであったかが見えてくる。修羅能作品の「いくさ語り」の素材として、『平家物語』に目新しい合戦譚を求めるることは出来ても、作中場面の創出に關わる詞章の作詞においては世阿弥に及ばない、先行の作品に見える源氏寄合を転用・二次的使用に留まらざるを得ない世阿弥周辺における謡曲作者の力量が窺える。こうした能作の傾向がやがて新鮮な興味を失わせ、「いくさ語り」以外にも見せ場を持つ世阿弥的な修羅能の創出は、謡曲作者の技量の不足もあって衰退に向かつた。そして修羅能は、世阿弥作の目ざした修羅能とは異なる作品を指向するに至るということではないだろうか。

世阿弥及び世阿弥の影響下にある作者の作と考えられる修羅能をめぐつて、その能作における源氏寄合の手法の分析から導かれるものは、右のようないくつかの問題である。修羅能の詞章に見える

源氏寄合は、修羅能能作の変遷を読み解く一つの手掛かりなのである。

[注]

1 「『教盛』のクセと源氏寄合」(『能研究と評論』6、昭和五十一年七月)、「須磨を舞台とした能」(『能楽タイムズ』第29号、昭和五十一年七月)。

2 竹木幹夫氏『源氏物語』と謡曲』(『国文学解釈と鑑賞』昭和五十八年七月・『観演序・世阿弥時代の能楽』に再録)、伊藤正義氏『新編日本古典集成 謡曲集』の頭注及び解題、等。

3 本稿に引用する世阿弥伝書は、表章氏校注『日本思想大系 世阿弥禪竹』に拠る。『中世における源氏物語の歌謡化(一)・(二)』「源氏」「源氏恋」「源氏紫明両栄花」の場合)、「『芸能』九巻第十一号・第十二号・『早歌の創造と展開』に再録)等。

- 三角洋一氏校注『新日本古典文学大系』とはすがたりたまきはるに拠る。
- 『万葉集叢刊中世篇』所収京都大学本に拠る。
- 『延慶本平家物語 本文篇』(勉誠出版刊)に拠る。
- 『日本古典文学大系 平家物語』に拠る。
- 光源氏一部連歌寄合は、加藤洋介氏「二条良基周辺の源氏学—国文学研究資料館蔵『光源氏一部連歌寄合』の紹介と翻刻」(『国文学研究資料館紀要第十八号』平成四年三月)に拠る。『光源氏一部連歌寄合之事』は、岡見正雄氏校『古典文庫 良基連歌論集三』に拠る。その他、公刊の『源氏小鏡』各種資料等を参照した。なお、諸書の成立等に関しては、伊井春樹氏編『源氏物語注釈書・享受史事典』を参考にした。
- 「琴」については、『光源氏一部連歌寄合』に掲げられているが、須磨巻の何れの件に拠る寄合かは不明である。
- 『日本古典文学大系 中世近世歌謡集』に拠る。
- 竹本幹夫氏「琳阿房—南北朝期一曲舞作者の横顔—」(『芸能史研究』53、昭和五十一年六月・『觀阿房・世阿房時代の能楽』に再録)。
- 『源氏肝要』明石巻に「源氏に問はず語りといふこと、二つあるべし」とあり、明石巻には、明石入道によるものと光源氏による紫の上の書面上のものと二つの「問はず語り」がある。『源氏小鏡』や『光源氏一部連歌寄合之事』は光源氏の「問はず語り」を掲げており、「山頂湖面抄」の叙述は、明石の入道の「問はず語り」を指している。稻賀敏二氏「異端の爪あと」「源氏肝要」が肝要としたもの(『古代文学論叢第三輯 源氏物語・枕草子』昭和四十八年一月、武藏野書院刊所收)は、何れを指すかは中世前・中期における『源氏物語』の秘伝事とも関わることを指摘している。(西国下)では、「六十あまりの秋を経て」とある為、明石入道の「問はず語り」を指すものと解した。猶須磨源氏の詞章に見える「問はず語り」は何れを指したものか判断出来ない。
- 本草における『源氏物語』本文の引用は、池田龟鑑氏『源氏物語大成』に拠る。同書須磨・明石巻の底本は大崩本。
- 稻賀敏二氏『源氏物語古注集成2 今川範政源氏物語提要』に拠る。
- 木藤才蔵氏・重松裕巳氏校注『中世の文学連歌論集』に拠る。
- 表章氏編『観世文庫藏室町時代謡本集影印篇』所収の永正十四年觀世大夫元広與書本(『松風村雨』)に拠る。
- 今井源衛氏・古野優子氏編『祐倫著源語梗概・注釈書 山頂湖面抄諸本集成』所収の神宮文庫本に拠る。猶伝定家訣『光源氏卷名歌』は、『光源氏一部連歌之事』にも見えるが、異文があり歌意が通りにくいので、『山頂湖面抄』の本文を掲げる。
- 今井源衛氏『源氏物語古注集成3 祐倫光源氏一部歌』に拠る。
- 井爪康之氏『源氏物語古注釈尋流抄』に拠る。
- 渋谷栄一氏『源氏物語古注集成6 源氏秋』に拠る。
- 続群書類従本校訂した『宴曲十七帖附語曲末百番』(大正元年、国書刊行会刊)所収の本文に拠る。
- (蟻通)には、本来、ワキ登場段に、松井文庫藏庵手沢本注記に見えるような「もじまの大官人は暇あれや桜かざして日をくらし我はあさたつたび衣身をうき秋にをきかぬる...」の詞章があつたと、伊藤正義氏へ『新潮日本古典集成語曲集上』「蟻通解題」他先覚が指摘されている。この詞章は、『和漢朗詠集』「ももしのの大官人はいとまれや桜かざして今日も暮しつ」(「春興」赤人等に見える歌を引いたものであるが、作中時間は秋である(蟻通)に季節不同の歌が引かれた理由が不明確で、同歌を引いて須磨巻で源氏が詠んだ「いつとなく大官人のこひしきにさくらかざしけふもきにけり」の歌が想起される。(応永・永享期の連歌の語彙) (『連歌の新研究 論考編』平成四年二月、桜楓社刊所収)。
- 拙稿『語曲(雅)』の「いくさ語り」—修羅能における「いくさ語り」の終息(「國語國文」平成十七年九月)。
- 佐谷眞本人氏『語曲(敦盛)』『経盛』『生田敦盛』(『平家物語から淨瑠璃へ 敦説話の変容』平成十四年十月、慶應義塾出版会刊所収)は、平敦盛をシテとする(敦盛)・(生田敦盛)が、須磨・生田と異なる地を舞台として設定する背景について、大手生田側と攝手一の谷側とで異なる伝承が存在したことを探定されているが、金春禅鳳作(生田敦盛)の成立には、生田を舞台としつつ須磨巻源氏寄合を多く引用する(雅)が先に成立していたこととも関連があろう。
- 『島津忠夫著作集第五巻 連歌・俳諧・資料と研究』(平成十六年十月、和泉書店刊)所収の西高辻家本に拠る。
- 稻賀敏二氏『中世文裝叢書2 中世源氏物語梗概書』に拠る。
- (河原太郎)は、田中允氏(河原太郎)(『語曲界』昭和十七年十一月)が指摘されたように、作者附『自家伝抄』等の永正期の資料に名が見え、間往言の詞章も数本伝存する、室町期に実際に演じられた古曲であり、氏は世阿弥周辺で成立した可能性も指摘しておられる。
- 「(須磨源氏)の成立と構想」(『観世』平成五年三月・『能の主題と役造型』に再録)。
- 『源氏寄合一面・室町期源氏享受における展開』(『國語國文』平成元年十月・『源氏世界の文学』に再録)。
- 「付言」本稿をなすにあたり貴重な資料の閲覧を賜った法政大学能楽研究所・天理大学附属天理図書館・関係諸研究機関に厚く御礼申し上げる。